



Hiroshima City University Language Center

広島市立大学語学センター
Newsletter No.59 (2018.3.30)



ランゲージチューター（ランちゅー）始動

語学センター長・国際学部教授
渡辺 智恵

昨年度（2016年度）、語学センターにおいて「学生ランゲージチューター制度」（通称、「ランちゅー」）が創設され、今年度（2017年度）から運用が開始されました。この制度は、授業外での外国語学習を支援することを目的として、日本人学生がその母国語である日本語を外国人留学生に、外国人留学生がその母国語を日本人学生に教えるという制度です。外国人留学生は、日本語での会話練習はもちろん、日本語で書いた授業のレポートや論文を実際に提出する前に、言いたいことがうまく日本語で表現されているか、助詞や漢字の使い方が間違っていないかなど、日本人の学生ランゲージチューターにチェックしてもらうことができます。日本人学生は、外国人留学生のランゲージチューターに会話パートナーになってもらい、授業や課外で学んでいる外国語の実践的な会話能力を高めたり、留学出発前の集中的な外国語訓練の場として、また留学後に外国語での会話能力を落とさないための継続学習の場としても利用することができます。今年度は計53.5時間の制度利用があり、そのうち、外国人留学生による日本語論文チェックでの利用が48時間、日本人学生による外国語会話練習での利用が5.5時間となっています。

学生ランゲージチューターとして、外国語学習の手助けをしたい学生は登録が必要です。学生ランゲージチューターには、外国語学習支援を行った時間に応じて報酬も支払われます（2017年度末現在、1時間当たりの報酬は学部生920円、博士前期課程の学生1,000円、博士後期課程の学生1,200円）。また、学生ランゲージチューターに教えてもらいたい人も登録が必要です。教えたい人と教えてもらいたい人をマッチングさせ、マッチングが成立したら、語学センターのランゲージラウンジで学習支援を行ってもらいます。

この制度の最大のメリットは、授業での学習とは異なり、自分のニーズに応じた外国語学習の支援が受けられるという点です。また、単に教える人と教えられる人という関係を超え、外国人留学生と日本人学生の相互理解や交流につながることも期待しています。皆さんの登録をお待ちしています！



ランゲージラウンジで行われているランゲージチューターの様子。
2組、それぞれ留学生に日本語を指導。左奥が江原さん。

目次：

ランゲージチューター（ランちゅー）始動	
語学センター長・国際学部 渡辺 智恵先生・・・	1
ランゲージチューター体験	
国際学研究科博士前期課程 江原 至さん・・・	1
退任される先生方からのご挨拶	
元語学センター長・国際学部 樂 竹民先生・・・	2
国際学部 佐藤 深雪先生・・・	2
恋は終わっても芸術の崇高性は永遠	
フェルメール《デルフトの眺望》	
名誉教授・芸術資料館もと館長 大井 健地先生・・・	3
海外提携大学とオンラインで、新しい授業の可能性	
留学帰国生など、独ヴァインガルテン教育大学と・・・	4

ランゲージチューター体験

国際学研究科博士前期課程 江原 至

今回、ランゲージチューターとして、中国からの留学生の修士論文作成をお手伝いしました。具体的には、毎週1回2～5時間、日本語の論文の下書きを読んでアドバイスをを行いました。日常生活さえ困難が伴う異国の地で、異国語でレポートや論文を書く留学生の苦労の大きさは計り知れません。アドバイスにあたっては、この文章はなぜ変えたほうが良いのかなど、できるだけ例を交えて理由を説明し、留学生の努力が無駄にならないよう気を付けました。

この活動は、基本的には教える・教えられるの関係ですが、教える側も多くのもので得ることができると感じます。まず、論文のテーマ、そして留学生の故郷や関心事について理解を深めることができました。ま

た、留学生の論文作成方法やスケジュールを知り、自らの論文作成について考える助けになりました。さらに、普段使っている表現や文法がきちんと説明できないことを再認識し、ことばを見つめ直すきっかけにもなりました。相手の留学生と仲良くなり、外国の友人ができたことも挙げられます。

留学生と関わる機会は、自発的に動かなければ、そう多くはありません。日本語は専門分野ではありませんが、活動を通じて、ほんの少しでも留学生と関わり、助けになると同時に、自らもさまざまな刺激を得ることができました。活動内容を見て何か惹かれるものがあれば、ランゲージチューターはとても良い経験になるはずです。

目印はランちゅー



退任される先生方からのご挨拶

開学時から教鞭を取っていらした欒竹民先生（国際学部教授・元語学センター長）と、佐藤深雪先生（国際学部教授）が、3月31日をもって退任されます。

欒竹民先生は、平成14年度に第4代語学センター長に就任され、2年間在任されました。佐藤深雪先生は、長年に渡り語学センターで日本文化史の授業をされ、映画のご推薦も多数いただきました。

お二人の先生のご挨拶と推薦映画をあわせて掲載いたします。

明るい未来、無限の可能性で溢れた語学センターに

国際学部教授・元語学センター長
欒 竹民



欒先生
ご推薦の中国映画

山の郵便配達
初恋のきた道
北京ヴァイオリン
故郷の香り
海洋天堂
小さな中国のお針子
単騎、千里を走る。

語学センターは広島市立大学開学と共に1994年に開設され、今年度で約四半世紀の歳月となった。人間に喩えて言えば、「三十而立（三十にして立つ）」まであと六年あるが、正に青春を謳歌している年齢であり、明るい未来、無限の可能性で溢れている。

開学当初から中国語教育を担当してきた私は語学センターと浅からぬ縁があって、語学センターの歩みと共に24年教鞭を取ってきたと言っても過言ではないが、その間に不肖ながら平成14年～16年センター長を拝命していた。私にとって語学センターは教育場のみならず数多くの思い出が一杯詰まっているところでもある。

語学センターは本学主要施設の一つとして地球規模で進化しているグローバル化の潮流にともない、日増しに高まっている実践的な外国語運用能力のニーズに応えるため、開学当初から最先端のCALL機器を導入してその先駆けを自負し、その後も多言語学習環境の構築、共同学習環境の整備及びインフラ整備によるネットワーク機能の向上など、外国語学習環境改善に向けた機器更新を重ね、今日に至っている。開学以来、本学の花形として毎年、オープンキャンパス等で本学を訪れる多くの人が、開かれた、地域に根差した大学を目指す本学の存在感を語学センターを通して感じている。

教育改革の波が次々と押し寄せてきている大学は、これまでに経験していない激動の変革に直面している。本学の看板としての語学センターはハード面だけではなく、ソフト面も多様な必要性に応えるべく、更なる整備、充実、変容を図る必要があり、よりよく利用しやすいように期待している。「桃李不言 下自成蹊」（桃李言わずとも、下自ずから蹊を成す）。優れた環境でよい教育が行われるところに自ずと有能な人材、ポテンシャルの高い学生が集まってくる。語学センターも然りである。

最後に長年に亘ってお世話になってきた語学センターの皆様に衷心よりお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。謝謝！

漱石研究、知のトライアスロン事業、クールダウンにはまだ

国際学部教授
佐藤 深雪

佐藤深雪先生
ご推薦の映画

＜洋画＞	＜日本映画＞
上海から来た女	東京物語
めまい	晩菊
去年マリエンバートで	他人の顔
フィツカルド	陽炎座
ゴーストドッグ	トニー滝谷

本学の開学以来、24年を広島市立大学で過ごしました。たくさんの学生とよき同僚に恵まれ、この日を迎えられることを感謝いたします。1995年には阪神大震災、2011年には東北大震災と、地球規模の変動に急かされるように、あるだけの考えを何とかして形にするために、この20年は本当に忙しい毎日でした。広島に来てから手をつけた漱石研究がようやく論文の形をとりはじめ、そのいくつかが広島県大学共同リポジトリ HARP に収蔵されているのは大きな喜びであり、ささやかな社会貢献でもあります。



“佐藤先生ありがとう”
の文字

クールダウンにはまだいくらか時間が必要らしく、ぽつぽつ続けてきた知のトライアスロン事業に今年も参加させていただく予定です。どうぞ、学内で見かけましたらお声をかけて下さい。長い間、ほんとうにありがとうございました。

2017年度 いちだい知のトライアスロン英語多読マラソン

昨年度から開始された「いちだい知のトライアスロン英語多読マラソン」が、今年度も12月19日（火・説明会）～1月31日（水）に実施されました。2名が参加し、感想レポートが投稿数は5でした。2月8日（木）の昼休憩時、図書館1階英語多読本コーナー前にて、終了式が行われました。



失われた時を求めて美術館 1

À LA RECHERCHE DU TEMPS PERDU

恋は終わっても芸術の崇高性は永遠

フェルメール《デルフトの眺望》(1660年頃 マウリッツハイス美術館)

大井健地(名誉教授・芸術資料館もと館長)

ブルースト(1871-1922)は実人生でフェルメールの《デルフトの眺望》(1660年頃)を2度見ている。1902年10月18日のデン・ハーグと1921年5月末のパリとである。初回の感動経験を「世界で最も素晴らしい画を見た」と友人ヴォードワイエ宛て書簡に記している。

*

文豪ベルゴットはもう長く患っていた。外出はせず、ずっと家にこもっていた。「在宅療養」中なのだ。ところがフェルメールを見に出かけて《デルフトの眺望》の絵の前で永眠する。

『失われた時を求めて(以下、RTP)』の筆は作者の「意識の流れ」のままにあちこちを経由する。「数ヶ月、ベルゴットは不眠に悩まされていた。そしてなお悪いことに、寝入ったとたん悪夢に苦しめられ」て眠れない。不眠と悪夢の支配に唯一対抗しうるのは、睡眠薬。しかし薬は有毒で習慣性を持ち、中毒をおこすことがあり結果、薬害は病気の害よりいっそう重大ともなるのである。



左は、会場に出かけたブルースト(1921年5月末、生前最後の写真)。

医者には安静を命じられていたがベルゴットは展覧会場に「ジャガイモを少し食べてから」出かけた。「ある批評家が(略)小さな黄色い壁面(ベルゴットは想い出せなかった)がじつにみごとに描かれていて、そこだけを見ると中国の貴重な工芸品のようでそれだけで自足した美しさを備えていると書いていた」(RTP10巻414-5頁)。もとになる美術批評家ヴォードワイエの文では「レンガの家並は(略)なにを描いたものかという主題は忘れて、その小さな表面だけを取り出してみれば、油絵とはいえ陶磁器を見ているような気がする」(吉川一義『ブルースト美術館』90頁)となっている。実物の絵を前に「その批評家の文章のおかげで、はじめてベルゴットは青い服を着た小さな人物が何人かいること、浜辺がバラ色であること、最後に小さな黄色い壁面の貴重なマチエールに気がついた」(RTP前同415頁)という次第である。

「小さな黄色い壁面」が画中のどこかわかりますか。三方を青い屋根が囲む、風と陽を浴びた黄色い、じつは「屋根」の部分。そこを、じっと見つめベルゴットはつぶやく。絵具を何度も塗り重ねたこの黄色い面のように、文それ自体を大切なものにすべきだった。おれのはあまりに無味乾燥だ。目まいがする、さっきよりもっとひどい。生煮えのジャガイモによる消化不良だ—なんでもない、と思ったとき発作がベルゴットを絶命させている。ベルゴットの葬儀の夜、本屋では彼の著作が「翼を広げた天使のように三冊ずつ飾られて」いた。

多種公刊されている画集で(ぜひ大型カラーで)「世界で最も素晴らしい画」を見てもらいたい。ここで質問。デルフトは今、何時か? もうひとつ、こちら岸、「バラ色」の

浜辺にいる人の数は? 諸史料により1660年の夏以前の制作。雲や大気の状態から夏の朝。そして只今の時間は絵で誰もが確認できる、対角線の交点のやや左下の位置、スヒードム門の時計が7時10分を示している。人数は7人(左端に白いものをかぶった母子。腕に抱きかかえられた子は母の肩の位置)。つまりデルフト市街南のスヒー港の乗合船の発着場の朝7時10分の都市景観が本図である。特定の場所と時刻、にも関わらずフェルメールの絵の力が僕らに啓示するのは絵画芸術がもたらす永遠性についてである。

ブルーストはフェルメールの芸術仕事に感応できそれをあたためて生かしうる人だった。フェルメール学者スワンを生み、スワンのフェルメール熱愛はRTP全篇の品格と骨格を強めた。

*

岩波文庫版によってRTPのフェルメール関連記載箇所を摘記しておく。

②44。[第2巻44頁の略]「原因の画家さん、まだご健在ですの?」「愛情が恐いとおっしゃるの?」

②366。図26《ディアナの身づくろい(——と連れの

女たち)》。フェルメールの作と確信。

③103。服飾デザイナーの名と同じ、耳慣れる。

③235。「ああ、それはね、主人があたしに言い寄っていたころずいぶん調べていた画家なんですよ」。

⑦398。「いやあ、デン・ハーグ、なんてすばらしい美術館だ」。

⑧246。「じつはフェルメールだって」。

⑩318。図52《取り持ち女》。「気品ある威厳」?

⑩416。図55《デルフトの眺望》。「小さい黄色い壁面」。

これだけのフェルメール言及の数ヶ所を拾い読みして、それだけのことでスワンのこうむった『『スワンの恋』の地獄のような猜疑と嫉妬(訳者②550)の苦しみが凄絶に甦ってくる。「なんてかわいそうなスワン」とレ・ローム夫人は夜、夫に言う。「あんなに頭のいい男が、あの手のばかとか言われている面白くもなんともない女のために苦しむなんて」。だがそれは恋をしたことのない者の分別が「コンマ菌のような微生物のせいではどうしてコレラにかかるのか」と驚くようなものなのだ(②344)。

疑念は捨てきれず捨てばちな気にもなりうる日々。だがどのような恋も、恋はすべて終わる。

さらに、人々の意識のいかなる活動も死によって終了するか。作品を構成する死の連鎖は作家ベルゴットから美術研究者スワン、そして作曲家ヴァントゥイユへと至る。3人の「芸術家」は「永久に死んだのか? だれがそう言えよう?」

恋は終わっても、「芸術家」と「芸術」作品の崇高性は終わらない。作者の死後も鮮烈明晰に生きる。新しい人、後生の人に永続的な芸術を見つめさせている。

海外提携大学とオンラインで、新しい授業の可能性

留学帰国生など、ドイツ・ヴァインガルテン教育大学と



上：スクリーンに市大生の発言を聞く
ヴァインガルテン教育大学の教授2名
下：パソコンで各自がアクセスして参加

今年度後期、火曜日5限のドイツ社会論（国際学部専門科目）で語学センター共同研究室が使用されました。

ドイツ社会論は、ドイツに留学した学生が帰国後もドイツ語を忘れないようにすることを目的として今年度新設されたドイツ語上級者向けの授業で、本学と交流協定を締結したヴァインガルテン教育大学との遠隔授業形式で行われました。

外国とのリアルタイムの遠隔授業では、時差が大きい欧米の国が相手の場合、時間設定が難しく、語学センターでは南太平洋大学マーシャル諸島キャンパスの学生と Skype を使ったセッションが行われたことはありますが（語学センターニューズレター 43 号掲載）、授業は初めてです。ドイツ社会論は相互にな

んとか都合がつく時間帯ということで5限に設定され、市大からは7名、ヴァインガルテン教育大学からは9名が受講しました。授業は、ヴァインガルテン教育大学グレゴール・ラング＝ヴォイタージク教授とヨーク・シュトラトマン教授がファシリテートし、市大側は国際学部ト部匡司准教授が監督して、ドイツ語でグローバル学習について日独学生混合グループでディスカッションと発表を行いました。

市大側受講生は、現在、ヴァインガルテン教育大学に留学中の学生1名（ヴァインガルテン教育大学側から参加）と留学帰国組4名を含む、ドイツ語Ⅲ・Ⅳから更に上級を目指す意欲的な学生の皆さんで、語学センターニューズレター 51 号でご紹介した先輩、国際学部卒業生の北瀬結香子さん（第15回全日本学生ドイツ語弁論大会第1位を受賞）から大いに刺激を受け、留学を決意した学生もいる、という良い循環が生まれています。受講者からは、「すべてドイツ語で実施するのは難しかったが、日本にいながら海外の大学に留学して勉強しているような感じでした」という反応があり、ドイツ語のブラッシュアップに大変良い機会となりました。

ト部准教授は、「すべてドイツ語で実施したにも関わらず、学生たちが自分の分かる部分を他の学生に教え合い、なんとしてでも理解して議論に参加しようとする姿勢に感銘を受けました。いまの学生たちは勉強しなくなったと言われますが、この学生たちを見ていると、そんなことはなくすごく勉強しようと頑張っています。」とコメントしています。

なお、この授業で利用された Adobe Connect は一般の Webinar (web+seminar の造語) でもよく利用されるツールで、ヴァインガルテン教育大学が用意したものです。市大側からはブラウザで指定の URL にアクセスし、授業中任意の学生に発言権を与えるなどのコントロールはヴァインガルテン教育大学側で行われました。遠隔通話やインタビューでよく使用される Skype は無料で手軽なツールですが、Webinar に特化したこのようなツールでは、復習用に録画面面をライブラリ化できる機能もあります。ライブ映像、音声、チャット、資料提示機能が利用でき、授業中の問いかけに対して、任意の学生に回答させたり、教員や発言者の音声を妨げることなく、受講者がチャットでコメントしたりもできます。音声トラブル時もチャットで状況確認しながら解決・対応を図ったりできます。



画面右にプレゼンテーション表示。左は上からファシリテーター映像、参加者リスト、チャットウィンドウ。

ドイツ社会論での遠隔授業は試験的なもので、来年度も同様の形式をとるかどうかは未定ですが、新しい形の授業として、また、上級を目指す学生を対象とした授業の可能性として、今後の発展が期待されます。

●日本語 e ラーニング受講者、日本語能力検定試験N1に3名合格

前期に引き続き、後期も日本語 e ラーニング JLPT N1 模擬試験を 2017 年 11 月 5 日～12 月 3 日に実施し、3名の留学生が受講しました。

e ラーニング受講者の JLPT N1 受験・合格状況は右表のとおりです。

	前期	後期
eラーニング受講者数	9 名	3 名
N1受験者数	4 名	2 名
合格数	1 名	2 名

発行日	2018 年 3 月 30 日	Phone	(082) 830-1509
発行	広島市立大学語学センター 〒731-3194 広島市安佐南区大塚東 3-4-1	Fax	(082) 830-1794
編集	堀本真由美（内線：6410）	E-mail	lang@intl.hiroshima-cu.ac.jp
		ホームページ	https://call.lang.hiroshima-cu.ac.jp/lang/index.html